

細菌戦と現代

第4号 04.3.1



原著は、1988年、天山出版刊。農作物に影響を及ぼす生物兵器を扱ったスパイ謀略小説である。ソ連のペレストロイカを潰すために、米のCIAが、南アフリカからソ連の穀倉地帯に渡りをするコウノトリに細菌を仕掛けた。それを阻止する方法は、ボスポラス海峡で、コウノトリを絶滅させるしかない。

コウノトリは、羽ばたくのではなく、上昇気流を利用して帆翔するので、上昇気流の弱い広い海を渡れない。対岸の見える狭い海峡の手前に集まって、上昇気流に乗り2000mの高度から、対岸へ向かって滑空する。その場所が、ボスポラス海峡である。

細菌は、シュードモナス・シリング（氷核活性細菌）という、どこにでもあり農作物の表面に繁殖して、霜害を引き起こすもの。これは、 -20°C でも凍結しない純水を -2°C ～ -4°C で凍結させ、水が凍結を開始するとき

の核として働く。人工雪を造るスノーマックスに使われている。この能力を強化して、生物兵器にした。

しかし、この生物戦の計画は日本からの僅かな情報をもとに、調査して、判明したが、すんなりと調査が出来たような気がしなくもない。なぜコウノトリなのか。コウノトリは、ヨーロッパ人に愛され、特別あつかいで保護されている。コウノトリを殲滅出来たとしても、かえってどんな非難を受けるか。殲滅させることが目的ではないのか。

3月18日(木) 政府との意見交換会 午前9:45～11:30 場所未定

731部隊細菌戦裁判 控訴審第4回 101号法廷 午後2:00～

裁判終了後 デモ 3:00～ デモ終了後報告集会

浙江省と湖南省から原告や応援団32名が来日します。原告を応援してください。

(問い合わせ先 一瀬法律事務所 03-3501-5558)

新発見のペストノミ論文

ペストノミに関する論文は、南京1644部隊の近喰秀太のものが知られているが、新たに、731部隊の平澤正欣軍医少佐と村國茂軍医大尉の論文が見つかったので、概略を順次紹介する。

陸軍防疫研究報告等に掲載された平澤の論文は以下のとおりである。

- * 京都帝国大学に提出した博士論文
イヌノミ *Ctenocephalus canis* Curtis ノ「ペスト」媒介能力ニ就テノ実験的研究
医学博士授与 昭和20年9月26日

陸軍防疫研究報告

- * 第1部 第64号
飢餓蚤ノ能力ニ関スル研究 受付 19, 3, 20
- * 第1部 第65号
傷害蚤ノ能力ニ関スル研究 受付 19, 3, 20
- * 第1部 第73号
撒布蚤ノ各種環境ニ於ケル生存期間ニ関スル研究 受付 19, 3, 20
- * 第1部 第74号
蚤飼育用鼠ノ運動制限ニ関スル研究 受付 19, 3, 20

陸軍防疫研究報告に掲載された村國の論文は以下のとおりである。

- * 第2部 第7号
絶食蚤 (*X. cheopis* Rothsechild) ノ群居ガソノ生存ニ及ボス影響ニ関スル実験的研究 受付 15, 7, 30
- * 第2部 第12号
蚤ノ向色性ニ関スル小実験 受付 15, 4, 18
- * 第2部 第31号
「チフス菌煮沸浸出成分ノ感染防御能付与効果ニ関スル実験的研究
第1編 「チフス菌煮沸浸出液並ニ加熱ワクチン」及「フォルモワクチン」ノ感染
防御能付与効果ニ依ル比較 受付 15, 5, 8
- * 第2部 第32号 【未見】
温度並ニ湿度ト絶食「けおびすねずみのみ」 (*Xenopsylla cheopis* Rothsechild) 生存
期間トノ関係 受付 ?
- * 第2部 第68号
殺蚤剤ニ関スル実験的研究
第1報 (クレゾール) 石鹼液ヲ以テスル実験 受付 15, 8, 22-2-
- 第 * 第2部 第84号
明礬及ビ硫酸アルミニウム」ノ清澄作用ニ関スル小実験 受付 16, 3, 9

- * 第2部 第158号
「けおびすねずみのみ」(Xenopsylla cheopis Rothseild)ニ関スル実験的研究
第三編 水面ニ浮ビアル蚤成虫ニ及ボス水温ノ影響 受付 16, 8, 20
- * 第2部 第165号
「けおびすねずみのみ」(Xenopsylla cheopis Rothseild)ニ関スル実験的研究
第五編 成虫ノ遁走ヲ許サザル最大間隙ノ測定 受付 16, 8, 16
- * 第2部 第188号
「けおびすねずみのみ」(Xenopsylla cheopis Rothseild)ニ関スル実験的研究
第1編 成虫ノ交尾、吸血、産卵並ニ寿命ノ相互関係 受付 16, 12, 12
- * 第2部 第192号
「けおびすねずみのみ」(Xenopsylla cheopis Rothseild)ニ関スル実験的研究
第四編 飢餓成虫ノ体重減少ト、吸血後ノ体重増加トヨリ観タル蚤ノ吸血欲
受付 16, 12, 22
- * 第2部 第201号
「けおびすねずみのみ」(Xenopsylla cheopis Rothseild)ニ関スル実験的研究
第六編 成虫ノ体軀ノ前後軸長並ニ上下軸長測定成績 受付 16, 12, 30
- * 第2部 第215号
「けおびすねずみのみ」(Xenopsylla cheopis Rothseild)ニ関スル実験的研究
第八編 成虫ノ跳躍能(垂直移動)測定 受付 17, 1, 16
- * 第2部 第218号
「けおびすねずみのみ」(Xenopsylla cheopis Rothseild)ニ関スル実験的研究
第七編 成虫ノ跳躍能(水平移動)測定 受付 17, 1, 1
- * 第2部 第245号
「けおびすねずみのみ」(Xenopsylla cheopis Rothseild)ニ関スル実験的研究
第2編 成虫ノ組合セト繁殖 受付 17, 2, 7
- * 第2部 第251号
殺蚤剤ニ関スル実験的研究
第2報 酒精、石炭酸及ビ昇汞ヲ以テスル実験 受付 17, 2, 19
- * 第2部 第269号
「けおびすねずみのみ」(Xenopsylla cheopis Rothseild)ニ関スル実験的研究
第10編 成虫分離器ノ考案 受付 17, 3, 17
- * 第2部 第344号 【未見】
「けおびすねずみのみ」(Xenopsylla cheopis Rothseild)ニ関スル実験的研究
九編 人工飼育ノ可能性ニ就テ 受付 17, 4, 20
- * 第2部 第618号
飼育用吸血原大黒鼠ノ性別ト「けおびすねずみのみ」ノ繁殖トノ関係
受付 17, 4, 20

「イヌノミ」 *Ctenocephalus canis* Curtis ノ 「ペスト」
媒介能力ニ就テノ實驗的研究

滿洲第七三一部隊（部隊長 陸軍軍醫中將 石井四郎）

陸軍軍醫少佐 平澤正欣

上は、博士論文。平澤正欣は軍医であり、航空班のパイロット。増田美保と共に細菌戦を行った。学位が授与される前の、1945年6月に飛行機事故で死亡している。

- 目次は、第一 緒言
第二 実験材料及方法
第三 実験成績
第四 総括及結論
第五 文献

ケオプスネズミノミではなく、なぜイヌノミの研究なのかについて、論文の冒頭の緒言にこう書いている。

「本研究ノ動機ハ新京ペストニ其ノ端ヲ發スルモノニシテ昭和15年9月下旬新京ペスト流行ニ際シ此ガ防疫ヲ命セラレタル其ノ感染経路ノ究明ニ努メタリ而シテ・・・新京ペスト源泉ハ・・・農安ペストナルコト明白ナリ即チ新京特別市東三條通44番地田島犬猫病院ニ於テ初発患者ヲ出シ次イテ同家族及近隣ニ続発ヲ見タルハ一ニ農安某富豪ガ同病院ニ入院セシメタル一飼犬ニ依リ流行地病蚤ヲ搬入セルモノニアラズヤト疑ヒ余ハ本発患者ガイヌノミ *Ctenocephalus canis* Curtis ニ依ルペスト感染ナラズヤト着目シ本事実ヲ實驗的ニ證明セントセリ」

新京ペストの原因は、前号で紹介した高橋正彦論文とも違って、飼い犬に付いたイヌノミだという。イヌに対するペスト感染実験が行われていないので、ペストに感染したネズミかヒトの血液を吸ったイヌノミが、飼い犬に着いて農安に運ばれたということなのか。

「実験」を行うための、こじつけのような気がする。

また、「特殊実験ヲ行イ先人ノ見解ト異ナリ犬蚤モ亦人類ニ對スルペストノ媒介者タル新

事実ヲ発見スルニ至ル茲ニ之ヲ報告セントス」と、「さる」を使った実験を行ったことが記されている。

実験には、イヌノミの成虫雌を約500匹、白鼠20頭、海狸（モルモット）20頭、マウス68頭を使っている。ペストの菌株は、「960株研究室ニテ冷蔵保存シ時時海狸又ハ白鼠心血ヲ通過セル強毒ペスト株」である。

総括及結論は以下のとおり。

- ① 羽化後未吸血（飢餓状態）のイヌノミを、菌血症を発症した白鼠及び海狸に1回附着させると、白鼠は83%、海狸は63%が有菌蚤となった。2回附着させると、100%となった。
- ② イヌノミの胃内のペスト菌は、6日目まで漸次増加するものは、甚だしく多数だが、後緩慢に減少する。ケオプスネズミノミと比べると、菌の増殖と減少の時期が早い。
- ③ 保菌イヌノミを、マウス、海狸、白鼠にそれぞれ1回吸血させると、20%がペストを感染発症した。ペスト媒介力は保菌後の飢餓経過によって消長があり、また、個体により強弱がある。
- ④ イヌノミのペスト媒介力は保菌後3日目に最大になる。その後減弱するが、保菌後7日目頃でも、まだ動物を感染斃死させる力がある。媒介力はケオプスネズミノミと比べると、約1/2ないし1/3に相当する。
- ⑤ 保菌イヌノミの動物刺螫吸血時間は5ないし16分間で、平均10.5分間である。ケオプスネズミノミと比べると、約2倍である。個体間の刺螫時間の差は大である。飢餓日数並びに被刺螫動物（マウス、海狸、白鼠）を異にする場合の差は、個体間の差に比べ小である。
- ⑥ イヌノミの刺螫で感染発症した動物は、刺螫後4ないし10日目、平均9日目に斃死した。斃死動物の肺、肝、脾、心、及び鼠蹊部淋巴腺に多数のペスト菌が存在し、特に脾臓に著名である。また、腋下及び頸部淋巴腺からもペスト菌を検出した。
- ⑦ イヌノミの生存期間はケオプスネズミノミと比べると短い。保菌したものは特にそうである。イヌノミはペスト菌の媒介力を有する。

イヌノミはペストを媒介するが、ケオプスネズミノミと比べるとその力は弱い。即ち、生物兵器としては大分劣ることがわかる。

《 特殊実験 》

「イヌノミノ保菌後3日目ノモノヲ・・・さるノ大腿部ニ附着」させ、死亡した「さる」を剖検している。

さるのペスト菌への感受性は分からないが、「さる」への実験が、なぜ「特殊」な実験なのだろうか。「さる」の具体的な種類がなぜ書かれていないのか。

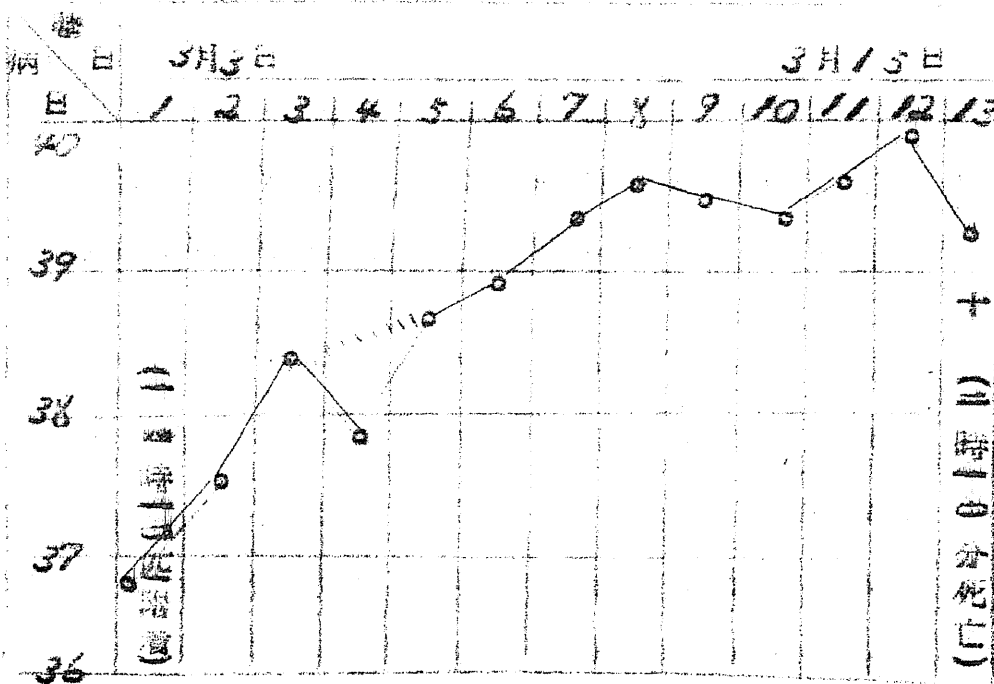
人間ノ平熱は約36.5度、さるの平熱は37～38度である。だが、「死亡さる体温表」

では、36度台から始まっている。

第8表 イヌノミニヨルさる攻撃

區分	供試數	感染發症數	感染率
1匹附着	3	0	(0%)
5匹附着	3	1	(33%)
10匹附着	3	2	(66%)

死にさる体温表



『奇病流行性出血熱』(朝野富三 常石敬一著 新潮社)の第四章人体実験の記述に「当時の研究者の一人は『サルはもともと平熱が高くて、三八度以上あつてやりにくかつた』とある。

総括及結論の⑧番目に「イヌノミニヨルさるヲ感染發症セシメタリ」としか記されていない。

イヌノミの「さる」に対するペスト感染は証明しているが、「人間」への感染について何もコメントしていないのに、「緒言」では、「特殊実験ヲ行イ・・・犬蚤モ亦人類ニ對スルペストノ媒介者タル新事実ヲ発見」と書いている。

「さる」は「人間」だろう。

この様な論文に、京都帝国大学は医学博士号を授与している。これが当時の常識か。

戦争遺跡



千葉県太房岬 人間魚雷回天の基地跡 コンクリート上にレールがあった



千葉県太房岬 俺灯所と探照灯（サーチライト）格納庫間の隧道

「1951年」住民の証言に基づき、ファスン郡議会「回帰熱の猖獗に関する住民の陳述確保」

突然の病気で10余名が死ぬ

細菌撒布前後、大規模な討伐と密葬

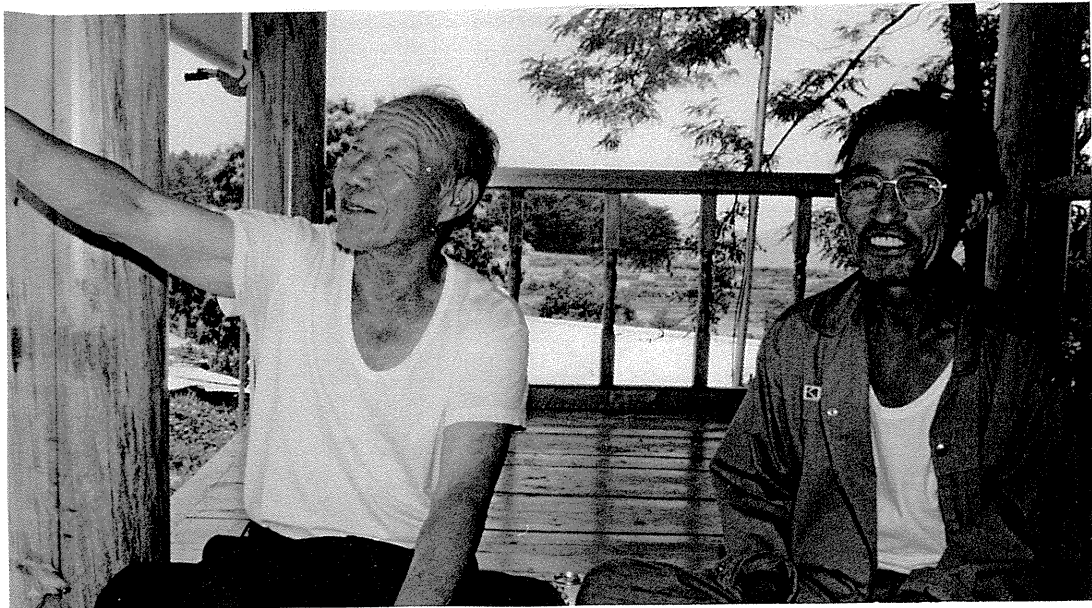
《続報》アメリカ軍の細菌戦によって、回帰熱の患者が、ファスン郡イソ面ヨンピョン里（当時トンドウン村）だけではなく、近隣のペガ山にもいて、細菌戦前後、数十名を虐殺、密葬したという主張が追加して提起され、細菌戦が無等山とペガ山一帯で広範に展開された可能性を裏付けている。

特にトンドウン村の住民が、当時、パルチザン討伐の名目で、住民を大量に虐殺、窪みに一度に密葬したという（6月9日 本紙一面、十五面）。一機の軽飛行機が細菌を撒布した後、討伐がなされたこととの関連性の究明が急がれる。

ファスン郡議会の朝鮮戦争前後良民虐殺真相調査特別委員会関係者は、10日、「1951年3月回帰熱の患者が、ファスン、ペガ山の北面地域で、広範囲に広がったという住民の証言を得、アメリカ軍の細菌戦の可能性について調査中だ」と明らかにした。

回帰熱で死んだ人が多かったというファスン郡イソ面近隣の住民たちの証言も相次いでいる。

トンドウン村の下の方にあるヨンシン里（現在ヨンピョン里一区）ノ住民クウォンモ氏（62歳）は、「1951年、母方の叔父が突然、下痢と腹痛を訴え亡くなった」「このような病気で死んだ人が、我々の村だけでも10余名になる」と回帰熱の可能性を提起した。クウォンモ氏は、「当時この病気は、主に50代以上の老弱者に多く発生した」と付け加えた。



討伐隊が、良民などを無差別に虐殺したという主張も提起された。

トンドウン村で生活していたナムモ氏(78歳 ファスン郡イソ面ヨンピョン里)は、「1950年陰暦11月7日(陽暦1951年1~2月頃)討伐隊が、トンドウン村に入って来て、子供と老弱者等に銃を撃って、自分の叔父と叔母等の良民50名以上が死んだ」「死んだ人の死体50余体が、村の竹やぶの後に、一緒に密葬されたが、一度も調査がされたことはなかった」と明らかにした。

ナムモ氏は、「一部の家族等は、そこで死体を掘り出し、先祖の墓などに移葬したが、一家全滅した家族の死体は、今もそこに埋められている」「当時、一日に何回も飛行機が無等山の裾を飛んでいた事実がある」と語った。(ファスン郡 キムヨンウック・パクチュンチェ記者)

文学作品に表れた「細菌戦」の可能性を裏付ける証拠

「太白山脈」・「アメリカ軍の飛行機が撒いた後、回帰熱が拡散」「故パクヒョンチェ教授も当時細菌戦に言及」(チョジョンネ氏)

「パルチザンノ娘」・「ファスンペガ山などの地で細菌撒布」

朝鮮戦争当時、アメリカ軍が細菌戦を行ったという事が、「太白山脈」などの文学作品にも言及されているが、小説的スタイル(間接話法)で単純に表現されている。

当時現場にいた一人のパルチザンの生々しい証言は、小説に登場している細菌戦の内容が、単純な表現にしか過ぎないこと、ファスン地域の細菌戦の報道に信憑性があることを裏付けている。

チョジョンネ氏によれば、1986年発刊された「太白山脈」(全10巻)にも細菌撒布の可能性を裏付けている内容がある。

「太白山脈」第8巻(第4部 戦争と分断編)315~318頁には、回帰熱という伝染病は、アメリカ軍の飛行機が撒いた病原菌で広範囲に広まった。この病気が、細菌戦で、発病するという証拠は、治療薬である馬破傷と606号を各派出所がすでに準備していたという事などが書かれている。

チョジョンネ氏は、当社との電話で、「当時ファスンでパルチザンの中隊長として活動していた故パクヒョンチェ前朝鮮大学教授から、偵察機がぼうっと白い噴霧液を撒いたのを直接見て、その後突然伝染病が広まったという話を聞いた」、「当時南朝鮮労働党全南道党で、活動していた2~3名もこのような事実を確認していた」と明らかにした。

チョジョンネ氏は、続けて「執筆当時は、軍政時代だったので、作家的苦悩と現実的な苦悩で、本にはこのような内容を間接話法で処理した」、「私は、端緒を提供し、事実を確認することは、後世の学者たちの任務だと考えていた」と語った。

両親がパルチザン出身であるジョンチア氏が書いた「パルチザンの娘」中編にも、1951年3月中旬頃の、(ファスンペガ山等の地へのアメリカ軍機による細菌撒布と全南道党の対応が紹介されている。(パクチュンチェ記者)

◎ 昨年の12月4日、731細菌戦裁判第3回公判がひらかれ、弁護団から、国家無答責への反論などが行われました。報告集会では、時間が無かったので少ししか意見陳述できなかった土屋弁護団長から、丁寧な報告をしていただきました。そろそろ、高裁での証人が決まるようです。事実関係や法律論の専門家が多く採用される必要があります。裁判官は、傍聴している私たちを気にしているようです。3月18日には、浙江省と湖南省から原告や応援団32名が来日します。傍聴に来て原告を応援してください。

「細菌戦と現代」購読のお願い

細菌戦裁判、731部隊、細菌戦、現代の生物戦、本の紹介、資料の紹介、などを掲載します。

購読料 2000円 年5回発行

郵便振替口座 00110-4-86543 731・細菌戦裁判キャンペーン委員会

パネル貸し出し「731部隊の細菌戦」

細菌戦の事実を知ってもらうために、パネルを作りました。内容は、731部隊とは、衢州細菌戦、寧波細菌戦、常德細菌戦、浙贛作戦細菌戦、恐ろしい伝播、裁かれる細菌戦の7項目です。細菌戦裁判支援のために、各地で、パネル展示会を開いてください。

ラミネート加工 A2 70枚 A3 2枚

貸し出し料 7日間 1万円 送料 実費 宅急便で送れます。



パネル展示 一橋大学にて

〒343-0832 埼玉県越谷市南町 1-7-5 奈須方

731・細菌戦裁判キャンペーン委員会 TEL・FAX 048・985・5082